勝海舟自記

斷腸之記

附 詩歌

新飭之記

斷腸之記

自序

我家寒微其祿衣食を供するに足らす又我性質至愚故を以て出身の途なし安政二年夏海軍傳習の事起り其選に當たるを以て出身の初度とす此後屢々危險に逢ひ爲に心膽烈する時あり或ハ悲惨堪へ難く死せむと欲して死せす生て苦辛に逢ふ事數回今や其悲危に逢遭せし顚末を記し已後自から練膽の資となさむとす是も亦生世の一案敢て他に示すにあらさる也

明治十一年十一月　　海舟

目録

一　安政三年長崎留學中コットル船航海の危難
一　同年晩秋咸臨艦を以て航海中對州北岸の危險
一　安政六年歸府の節朝陽艦航路南島近傍へ飄蕩の危險
一　文久三年京師寺町通り暗殺の危險
一　元治元年長州の兵京師の戰爭當時の危難
一　慶應二年家茂將軍大坂城に於て薨去の斷腸
一　同年八月十六日長州へ使す旅泊中の恐懼歸

途の危難
一 長州使命の日記を再讀し有感の記一章
一 慶應戊辰年自記一章
一 同年二月五日より十五日に至る兵隊脱走の危險三章
一 同年三月十四日高輪薩州邸に於て西鄕へ談判の記
一 同年四月十一日城渡の談判慶喜公へ言上の記
一 同年四月半藏門外暗殺の危險

一 同年五月官軍に殺戮を試みらる
一 悲風慘憺の小記二章
一 明治二十一年十年前の自記を讀む小記一章 後序と爲す

斷腸之記

海舟 勝 安芳 手記

安政三年秋コットル船に駕して暗礁に觸られ一船萬死を遁る小記

和蘭海軍傳習二ヶ年にして舊傳習生歸東新生徒來る教師もまた舊新交代せり此秋傳習休暇三日を得たり余教師に乞ふてコットル船に乘し遠洋に航せむとし其許可を乞ふ教師云ふ近日天候惡敷必らす颶風起らむ歟是を過ぎるは可なり我甚た危ふむ君が術暴風を凌くに足らずと余答て云ふ

余苟くも海軍從事の初め唯海上を以て死所とす難に當り危を冒す亦修業中の要ならむと教師云ふ君が言大に是なり唯希ふ求めて危險に臨むなかれ且地方十數里にして止むべき也と余大に悦び生徒柴弘吉以下七八名水卒六名を同伴して帆を張り五島邊に向きて航す時に微雨降り風又逆帆を操り斜走回轉法の如し時に南西黑雲掩レ天須臾艦頭を覆ひ暴風雨濤を捲き來る我輩力をきはめ帆を收め甲板上是を淩く備をなすといへ共心中先つ狼狽水卒指揮に反し風濤強暴の勢名狀す

べからず各必死を期し横に肥前地方に寄らむとす然りといへども術拙にして船意の如くならず瞬間にして元路に吹流され高島々頭にあたり碎破せむとする勢遁るべからず余諸士に令し錨を投し此力を以て須臾勢力を寛にせむとす然るに鋏鎖三十尋に及べども少感なく終に暗礁に當り衝突二回舵拔孔を生して海水浸入防ぐべからず此時余大に呼て曰く不肖教師の令を用ひず微力を察せず諸君をして此危難に臨ましめ且船を破摧す何の面あつて再ひ生ぜむやと此一言を聞て

大聲一呼士卒勇起ス

諸士水卒勇氣凛乎令に應し手足を働かすが如く幸にして船暗礁を離る又幸に風力雨勢大に減少す終に肥前地方に向ひ斜に走り入る此夜力を合し破帆を補ひ流失の諸材を修め穿孔を塞き少しも怠らず曉に及て風雨止み晴日を得たり一日大に船を修覆し終に他の助を待たず歸船するを得たり直に教師に面して其顛末を告け其命を用ひさるを謝す教師カッテンデーキ之を聞き微笑していふ今より後船舶の運轉君に任ずべし凡席上の傳習熟すといへ共危險に逢遭する景況十度は十

教師ノ一言ニ大悟スル所アリ

度の變あり一樣ならず何ぞ口頭の能く傳ふる所ならむや一度生命の際に逢はゞ其苦境を以て心中に自得するあらむ是を以て變化の術も亦自然に生ずべし解せる哉と余是を聞て學問と實際の區別を覺了し深く其教示に感服し又萬般の事活用の妙微に及でハ口頭にあらざるを省悟す

○安政三年晩秋咸臨艦を以て航海中對州北岸の危險

同年晩秋咸臨艦を以て五島に航し直に對馬府中に入る待遇甚渥し滯艦三日錨を拔きて釜山洋に

間髮ヲ入レザルノ危難

到り朝鮮を遠望す此時教師ハントローエン、ハルデス二氏と共に對馬北西を測量す海岸清泉小川を成して海に注ぐを見る兩教師余三人端舟を卸し流に沿て上岸一二町斗り川底極めて淺く皆美青石に成る突として教師大叫聲を發す余是が爲め大に驚き川の對岸を望めバ稻束を掛け日に晒すものあり亦後に瓦屋あり稻陰兩士人火繩銃に點火し我輩を覘ふあり余是を見て何の心も無く飛走、川に入り携ふる所の馬鞭を以て火繩を打ち拂ふ兩士亦大に恐怖し銃を負て瓦屋に遁走す余

續き到り大に叱咤す兩士余が日本人なるを知り大に恐れ陳して云ふ異船海岸に滯泊す忽ち小舟に乘して上岸す是國禁のゆるすべきにあらず我輩此に番士の命を奉ずるが故に如斯の擧動に及ひし也と余府内の待遇幷に傳習生にして船は是れ政府の蒸滊艦なるを示し蘭教師同伴の事を告知す彼等益恐れ此擧若し國主に告訴せられなば我輩の罪科測るべからず希くは君厚意を垂れ宥免せられむことをと懇々歎して止まず余亦田舍の賤士情を知らざるに出たるを以て敢て尤めず川

上に到らず艦に歸り其顛末を諸士官に告く此時余が心始めて定まり其冒險の念胸裏に滿ち毛髪竪立全肌粟を生じ恰も冷水を注くが如し

○安政六年歸府の節朝陽艦航路南嶋近傍へ飄蕩の危險

安政六未年近日江戸に於て海外へ使節を遣されむと云議既に決すと余断然決意して東歸を乞ふ正月五日朝陽艦を以て歸途に就く一晝夜にして下の關に入る直に航し塩飽島に到り滯泊す是此地の住民傳習以來其業を共にせし水卒皆此島民

に係るを以て也同十日内海を通航十一日拂曉紀州大島を通航す此時飛雪漫々西北風甚強し歸途を急くを以て意とせす直に針路を伊豆洋に取り大島を距る殆と三十里爰に到て風益荒れ雪片砂を捲くが如く加之怒濤甚高く舷を擊ち甲板上二三尺の海水あり衆員力を合せ暴風に備ふといへども非常の勁烈防くべからず余意を決し端舟を切捨て風力激浪を殺ぐ然れ共暴風強を加ふるを以て終に猶一層の暴威を加へは三桅を切捨て艦を飄蕩して其行く所に任せむとす此際の困難名

朝陽艦ノ難甲板上ニ絶息ス

狀すべからず外人に說くも孰か其苦況を察せむ幸に士官水卒死力を振ひ働作甚勵むといへども食を斷ち水中に立ち奔走一晝夜筋骨共に疲れ又如何とも爲す能はず余もまた甲板上に在れども激浪に捲れ殆と海中に落ちむとす故に自から後桅に添ひ體を縛し指揮して休まず身體氷冷音聲不出に到る此夜縛繩自から切れて甲板上に倒れ逆浪の爲に捲れ海に入らむとす此時殆と人事を失し眼目暈き起る能はず士官水卒是を見れども救ふ能はず幸にして一息出心氣復するを覺え自

から立て再ひ後桅に附縛し猶衆の動作を指揮す余此時難破の遁るべからざるを悟り衆と共に海中の鬼とならむとす豈計らむ風伯大に怒を止め激浪もまた低く一晝夜にして幸く伊豆洋に入り終に下田港に到り錨を投ず此行余が航海中の一難危此際の苦況今にして回想すれは膽力ともに委頓し利達富貴の妄念自から消滅す

○文久三年京師寺町通暗殺の危險

文久三亥年三月家茂將軍上洛の典を修む此時形勢甚危險なるを以て我か護衛甚多し且邦內苟も

議論を有する輩京師に集らざるなく隨て殺伐の氣尤盛也余海路を經て上京す旅舍皆充滿して投宿すべきなし半夜寺町通を歩行す忽として壯士三名一言を發せず腰刀を拔き擊たむとす余其不意に驚く余が側に從ふ土州人岡田井藏子帶する所の長劍を拔き忽ち躍出して其敵を兩斷す大言して云ふ弱士何を爲すと他二名大に驚き跡を見ずして遁れ去る余同氏の手術電光の如きに喫驚す後日同氏に云て曰く君人を殺すを嗜む勿れ殺傷の事甚不善なり今よりして先日の如き擧動は

改むへき也と同氏領承す微言して云ふ先日若しわれ在らずハ先生の首は體を離れむと微笑して立つ余また一言を吐する能ハず

○元治元年長州の兵京師の戰爭當時の危難

元治元年七月十八日余神戸海軍假局に在り京師にあたり一天赤色必らず非常生ぜしを思ひ觀光艦に令して出帆の準備を整ふ十九日大坂より急報あり云ふ京師に於て長藩發炮伏見表并に竹田街道蛤御門等戰爭云々直に乘船大坂に向ふ會て聞く毛利家嫡子長門守上京の爲め去る十三日國

許出發今夕歟或ハ兩三日中兵庫着總勢三千計り宿割等有之由我方に潜伏したる竹田庸二郎他一人へ告て云ふ京師暴發實に過激輩の一時愉快心より生ぜしならむ其事取るべきなし此輩と共に國家の大事を語する豈國主の趣意ならむや若し長門殿着あらば此一言を以て余か衷告を語られよと云

同廿一日大坂城内議論甚盛なり余云斥候を以て委敷其形勢を詳悉すべしと斥候者皆半途より歸り唯道路の説一も信ずべきなし余甚憤り自から

一彈笠ヲ貫ク

任して行く櫻宮より數町を過きて淀川中上流より一船飄々として來る内に壯士三名あり岸により上陸す余大に恐る進退如何とも爲す能はず佇立して其變を待つ彼れ上岸直に一刀を拔き忽ち差し違ふ一人猶後に在り立なから喉を貫き倒る余大に驚き身體粟立須臾歩する能はず是れ此不用意の擧動を目前に見たるが故なり暫くにして膽定まり其必敗を察し歸路に赴く忽ち三軒家前川中に一士あり對岸番兵火繩銃を亂發す其彈余が頭上を過る雨のごとし一丸笠を貫く幸にして

他の彈に中らず終に城に歸るを得たり後此死者の姓名を以て記さむとし百方探索すれとも終に分明ならず死骸は法を以て取扱ひたりしと聞く同夕敗兵五十八計長州大坂の藏屋敷に入るを以て諸侯の備兵に令し燒討せむとす余此擧に因り大坂市中灰燼とならむを痛み百方諭說終に邸内引移を令して去らしむるに到る此時邸の留守居北條清兵衛町奉行の達を得て禮服僕一人具して出頭す進退甚靜肅皆感す此際京攝の人心恟々として士人は殺氣を懷き途中劍を握りや丶もすれは暗殺せむとする者多く我輩また此輩に出合ふ事既

に兩三度終に遁れて無事を保ちたり

同年十月廿二日大坂城代より御用に付早々江戸へ歸府可致旨達せられ十一月九日退職の命あり家に謹愼す

余微力を以て奉仕する事爰に三年不思至愚邦家の安危存亡を以て任とし言聽かれす志達せす終に今日あり今や悠然榮辱を忘る唯累代の國恩に報ゆる能はざるを愁ふる而巳他何をか省みむ

放官の後數日を經て大久保一翁より密翰を寄て云ふ君近日政官の評甚惡敷近日封書の御尋出む

とす能く注意して激言を以て御答あるべからず
云々
（封書の御尋は上官罪ありとみとむる時諸家へ召預くる事前々の順序にして先つ封書を以て其勤職中可疑の件々を問はる答書差出の後再ひ御尋の儀有之親類同道評定所に可出の令あり出れは一と通り尋問の末尋中某家へ御預けの旨申渡あり某家は網乗物を用意し直に其家に伴ひ一室に閉居せしむ是より再尋問の末其罪の輕重により切腹其他の

刑或は終身預等に所置する也）
余今如何とも爲すべきなく竊に其命の到るを待つ此時邦家最も多事長州再征將軍上洛の擧あり形勢終に益困難なるを以て小官我輩の如き諸官棄て顧みず故を以て自然尋問の議止むと聞く而已嗚呼是余が一身の僥倖といへども此時よりして邦家の災害續き至るの基益固く終に挽回すべからざるの機となれり
慶應二寅年五月廿七日夜突然として奉書あり明廿八日禮服登城可致旨閣老水野和泉守より達す

是退職慎の者再用の式にあらす實に破格の擧也」
廿八日登城軍艦奉行命せられ即日大坂へ到るべきの旨也余甚た是を疑ひ老中に直談し御用の次第を問ふ答て云ふ此度の事將軍の直命に因るなりと余又云ふ所なし一兩日を經て上途す
坂地に着し閣老板倉伊賀守に逢ふ云ふ當今長州再征の擧に付薩州家甚不可然と言上す其臣大久保市藏岩下佐次右衛門內田仲之助說諭を不容其間答尤困難也汝速に上京し彼等に應接すべき也と余申す所あり後其事大に開通の路生ずるに及

べり此時會津其他の議論ありて大に困難數日を經て始て少しく聽かるゝを得たり

（其顚末難易建言始末一本に載す）

此後諸官に說く所あり大に不被容官吏甚憤り余を忌憎し進退大に困す終に退職を乞ふ聽かれず」

○慶應二年家茂將軍大坂城に於て薨去の斷腸七月十九日夜醫官松本良順より隱密の報あり將軍危篤終に薨去ありと余此報を得て心腸寸斷殆ど人事を辨せず忽ち思ふ所あり拂曉登城す城內寂として人無きが如し余最も疑ふ奥に入れは諸

官充滿一言を發せず皆目を以て送る慘憺悲風の景況殆と氣息を絶せむとす余大に勇を皷し後事を語ずれども答ふる人なし終に猶奥に進み入り閣老板倉稲葉兩氏に面晤す兩閣老も痛心の餘涙潸々たる而已余決意御後事の議を執り若し聽かれざる時ハ一歩も退くべからざるを期す幸にして閣老板倉其座より上京御後見一橋公の許に到らる其後

靈柩の如きハ御小性頭取野村丹後諏訪安房の兩氏身命を顧みず奉護して晝夜を分たず實に忠直

徳川氏滅亡ノ感

の士余甚だ其擧動に感激す

嗚呼是より已後の景況言ふべからず議す可からす心中竊に思ふ徳川氏今日にして滅亡す余仕官に在て此悲慘を見る双刀を擲棄し林下に栖息せむと決心彌堅し唯恣に坂地を去らざるハ余將軍の知遇を蒙ること深し余職掌の在る所軍艦を以て靈柩を奉護江戸に入れ奉り後一身を所置するに在る而已

(大坂旅寓に蟄し奉護の命を待つ)

○慶應二年八月十六日長州へ使す旅泊中の恐

懼歸途の危難

同年八月十五日京師大監察瀧川播磨守より急狀來る云ふ至急の御用あり病むといへともれして上京爲すべき也と余甚た惑ふ當地滯在の閣老に至り進退を問ふ令して云ふ速に命を奉ず可き也と直に出發十六日曉前京師一橋公の御旅館ゑ到る

公御參內中なり拂曉退朝直に御前に召され長州へ使す可きの命あり余思惟す是れ余が愚の能く爲すべきにあらずと固辭甚だ力む敢て命に應

せず公仰て曰くこれ我か申附るにあらず實に勅命に因る也辭する勿れと爰に及て亦何を云はむ直に所存を記して上申す皆可也との許しを得たり余心中に決す此行單騎生死他人の煩を爲すべからず前將軍薨去の時殉死に擬せバ何の恐れかあらむ唯愧づ力微才乏恐らくバ使命を辱めむ事をと（使命顛末は奉使始末に載す）

此行や藝地よりして味方の內情甚危險名狀すべからず彼に接するに倍す此悲風慘憺中萬死を冒

一人ノ使命顛末ヲ問フモノナシ

し辛くして日數廿九日を經京師に歸る

歸り來りて其顛末を詰問する者無く空敷二日を經たり余最も疑惑し後大に憤懣に不堪省みて悟る余は唯一使而已後來彼か處置の如き顯要の吏深く考る所あらむ余恣に口を開かバ大に不是を生ぜむ歟と終に意を決し退職表を奉る不被聽三日にして東歸の命あり即日歸途に就く

余籠居中考ふる所あり就中長州再征の如きは眞に兒戯に類す其兵弱にして諸侯も又命に應ぜず大兵を暴露する一年餘如此の拙孰か知らさらむ

此際幕府賴み倚るべき秘策あるを以て首を延べて其機會を待ち終に實際此拙に臨む終に依賴すべきもの賴むべからずして空敷國庫乏の實を顯す此際別に大手段無くして拙を重ね怨を買ふ嗚呼また如何故に余藝地に入り其形勢を視察するに諸家の秘密參謀に執事ハ財用乏敷殆と盡きて他に策なきに苦み軍機を思ふに暇なく諸兵は長陣に倦み疲れて憤懣怨望す若し今一ヶ月如斯ならバ諸隊令を不待して國に就むこと明々照々たり是れ他人の察せざる所一朝此機諸隊の了す

る所あらば其勢知るべからず測るべからざる也幕府も又近年の用途莫大にして金庫皆空耗要路の苦心あげて歎ずべきかな

○長州使命の日記を再讀し有感之記一章

維新後已に十年萬象皆改まり漸く奢侈に向ふ諸官心せよ余一言あり幕府已に朽腐自から倒れむと爲す時に當り是を倒す掌を反すが如し然るを察せず勇才に誇り隣國を侮辱し兵を弄し不急の工事を起し衣服居宅を華美にし厚税を課するが如き策の得たるもの

にあらざる也前車の戒反復して思ひ後事に心を用ゆべきは當今の急務忽とすべからざる也余昔長州に使せし舊記を讀み甚た感慨する所あり故に無用の一言を記す如斯

○慶應戊辰年自記一章

慶應戊辰の變ハ余が終身の愁苦危險慘憺の極なり奉命より以來是等は胸中に謀るといへども身底弱膽識不足其愁苦に狼狽す勉勵して説諭辨解すれども衆人余が心裡を察せず疑念甚しく薩長二藩の爲に遊説するの疑固く出れは途上に覘ひ

片桐且元ノ苦況ニ感ズ

討たむとし入れは激論殺害せむとす或ハ憤激して是を叱し或ハ諭して是を退かしむ今日の愁苦孰にか告げ孰にか訴へむ唯一片の精神不欺の志を以て死すとも自から泉下に愧る無きを期する而已

昔大坂の役片桐且元其中間に居て百變千化幼主を補弼す其苦況凡庸の及ふ所にあらず然れ共時の諸臣其忠諫に從ハず千慮萬苦終に水泡となり隨て豊臣氏の社稷滅す余今日の事に處して其愁苦を察す省るに古人に及ばざる事萬々如何ぞ我

が徳川氏をして全きを得せしめむ是を知て退かざるハ頗る愚也といへ共思ふに我が徳川歷代渥恩の名族近日の大變に逢て其方向を失し一も大義に苦慮盡力し死してやまむとする者なきハ獨り是余等の恥にあらず我が君家の恥辱後世之を如何といはむ譬へは一身八裂滿壑に擲たるゝもまた顧みるに暇無きものあり亦悲しからすや

三年三月十九日曉記

○慶應戊辰年二月五日より十五日に至る兵隊脱走の危險三章

夜中兵士ノ脱走

同年二月三番町の兵隊二大隊（一大隊歩兵五百名）其一隊ハ余自ら説諭し大に殺氣をそぐ一大隊夜に入り（二月七日の夜なり五日の夜にも二百人脱走）説諭に暇なく忽ち門塀を越て大路に出て銃を放ち暴動す隊附の士官如何共爲す能ハす既に同士討に及はむとす余既に鎮靜せしめし一大隊を以て土手脇に整列せしめ伍長に説て云ふ今此地に撃闘す甚た不可然也汝等もまた他隊と共に脱走すべし余か説を解する者あらは再ひ歸營なすべき也と其うちに他一大隊九段坂を下り陸續遁る余か説諭の兵隊中暗に乗じ五十名彈

若兵卒障トナリテ倒ル

裝し後より撃射す脱兵もまた蹈止まり余が印灯燈を的とし彈丸雨射忽ち余が前に立つ所の若兵卒二名胸を貫れ倒る此卒は甚た勇氣あり常に余が左右に随ふ者也是より四方暗夜となり余一彈をも受けず兵隊もまた悉く遁る土手脇の一大隊勢止まるを得す跡より千住に向ふて走る此時死する兵卒纔に四名手負六七名に止まる余幸にして免かる

同年同月五日の夜小川町傳習隊の兵卒二大隊深夜暴動して走る余に告ると櫛の歯を挽くより甚

しく如何ともなす能はず其走路高田の馬場に整列すと聞き單騎にして到る到れは隊去り暗黒中猶七八名を殘し追ふ者を防がむと爲すの手段あり余が腰の灯燈を見て亂射す彈丸雨射此夜微雨甚暗く彼れ余が一人にて追兵の來らさるを察知し板橋に向て走る余之を追ふ同所に到れは曉天既に明く三十六名を引きて歸る

同年同月十五日赤坂屯所の兵隊甲州へ遁がる八王子路に追て皆率ゐて歸る道新宿の旅宿後庭に入れて説諭す隊中の伍長脱隊を謀りし者遁れさ

脱兵ノ自殺

るを悟り同長善良なる某を不意に起て刺殺し已れも亦自殺す余是を以て死を遁かる

西陲ノ事ニ感ズ

此際の人氣老幼を不問唯戰ふを潔しとし死を不顧悲憤の極或ハ金を贈り食を與へ知と不知とを論せす雀躍勇を皷す幕吏も亦暗に是を賴むこれ情の止み難く止め難きの勢也當年西陲の事騎虎の勢如何そ防止するを得むや況や鹿兒島の壯士戰勝の後勢猛く氣傲なるをや余西鄕氏の心裏を察し我が當時の形勢を省み感慨に次くに涕泣を以てす餘歎

不止爰に數言を附す
兵隊の脱走なす士分より早し是れ暗に教官の教唆に係る士官も亦是等を止めむと云て脱走す故に士官ハ此際退き去て力を用ひず心中竊に兵隊の暴動脱走を奇貨と爲す者多し當時の形勢市街人もまたこれを悦ふ者十中にして九也
此時我か兵隊總員凡八千名に不ㇾ下紛擾の甚しき絶二言語一

○慶應戊辰年三月十四日高輪薩州邸に於て西鄕へ談判の記

同三月十四日高輪薩邸に於て西鄕に談判す是余が一生の難事也其初め官軍の兵卒神奈川を越え六鄕品川に至る衆卒高歌して云ふ德川の社稷可立慶喜は可斬云々と是を聞く者怒氣充胸双眼血を濺ぎ奮戰せむとなす者殊に多し君主號令嚴重日夜其怒心を宥められ少しも憤るの色なし唯余を殺さむとする者益多し是れ主公の恭順は余が建言する所其微意敵に降るにあり其首を切て軍神を祭らむと云ふに在り

十五日官軍江城侵擊と云其畧三道の兵必死を期し進めバ其後路の市街を燒き退去の念を絶せしめ城地に向て其死を期せしむと今日我が歎願を不ㇾ聽猶其策を擧て決戰をなさむとせば城地灰燼無辜の死數百萬終に之を遁がれしむる能はず彼此暴擧を以て我に對せバ我も亦彼が進むに先んし市街を燒き其進軍を妨け一戰焦土を期せずむバあるべからず此意を決して此策を設け今日の應對誠意に出るにあらされバ恐く貫徹爲し難からむ歟愚不肖是に任し一點疑を存せず若し百萬の

生靈を救ふにあらされバ我先づ是を殺さむと斷然決心して其策を回らす

余西郷氏へ趣意談判の末同人靜に答て云ふ此談判の決答一人にして決する不ㇾ能今日府中駿河へ出立督府へ言上すべし又明日侵擊の令ありと云て村田新八桐野中村半次郎を呼で見合せの趣意を述べ従容平素の如く他談に及び毫も大事に臨むの體無く面色温和一別以來の事を述べ他餘事に及ぶ余が心中竊に驚く襟度寛大一點私意を挾まず嗚呼今日ある實に此人の意匠に出るなり

高輪より入城迄途中狙撃に逢ふ彈丸頭上を飛ぶ事三回幸にして不中

○慶應戊辰年四月十一日城渡の談判慶喜公へ言上の記

我が江戸城引渡の事四月十一日を卜す十日夕刻池上本門寺先鋒總督に談判し直に上野大慈院に到り其顛末を上言す是れ主公謹愼の寺院也院内小室疊六ひらの小室也主公當正月以來未だかつて一日も安眠平食せず面貌枯瘦を見る余其胸裏を思ひ少隙を見て顛末を述べたり少しく降心あ

慶喜公血涙如雨

らむことを思ふが故なり此時主公余に向て仰せに曰嗚呼危哉々々若し如此ならは災害足下に生ぜむ如何ぞ諸官に告げ市民に令し兵隊に警め人選して其不虞に備へざる汝が所置甚だ粗暴にして大膽なり且談判其順序を不得今にして又如何せむ予が心裏を貫かずして斃れむ歟と血涙如雨余是を伺て心膽共に碎け腰足麻痺せり忽として悟る所あり回答して曰く嗚呼君上の言誤れり二月御決心の際大事を任する人無く臣が微力爲すあらざるを以て御受に不及然るに強て被命終に

憤然主君ニ言上ス

及ニ于今日一其時上言今日より後大難事或ハ大變に及ぶとも決て上言御指令を不用也と君上仰に曰もとより然りとの御言あり今日にして言上するものハ君上の御胸裏を恐察し默止する不能に因るが爲め也府下百萬の民生死の分今一日に臨み臣今日敢て恐懼の念あらむやと且言且罵し席を立て城外に向ふ此際の愁苦誰にか告け誰にか語せむ

此時の實際城内の事幷役員の指揮擧て大久保一翁に任せ余ハ城外幷官軍の擧動萬般を擔當す

半藏門外ノ狙撃

今にして當時を回想すれは是夢中の大夢余が天壽を縮する幾歳歟測るべからざる也

○慶應戊辰年四月半藏門外暗殺の危險

同年四月末麹町半藏門外を通行す時薄暮を過ぐ靜かに馬を歩して過ぐ此際官軍府下に入るを以て行人稀也忽ち後より官兵三四名小銃を以て狙擊す其彈頭上を飛て響く馬逸して後足を以て立つ余馬上にたまらず後面に落つ路上の石片にあたり頭後を強く打ち悶絶す少間人事を不レ辨自から氣息出てかへりみるに無レ人敵兵既に去つて跡

偶然他行殺戮ヲ免カル

冒險慘憺ハ余ノ常事

ゐし側數歩馬草を喫て立つ直に乘して歸るこれ敵兵銃殺せしとおもひ去りしに因る是を以て萬死を遁る誠に天幸といふべき也

○慶應戊辰年五月官軍に殺戮を試みらる

同年五月官軍二百名余が邸宅を圍み武器其他奪ひ去る余在らざるを以て殺戮を遁かる

(此日彰義隊上野戰爭の日也)

○悲風慘憺の小記其一

慶應四戊辰春より明治十一年迄に到り難危の衝に當たるを以て冒險慘憺ハ余か常事也且大抵掌

記に載す故を以て此集に省畧して載せざる也其最も悲憤慘然たる心膽裂くか如き難危の一二を以て爰に記す而已

嗚呼崇論高議して實際に拙く同屬相喰て國財海外に出るが如きこれ東洋諸州のまぬかれ難きの政畧なり吾人これを明悉すれ共止むる不能今後亦如何不可知後賢能く注目し再び誤りて邦家をして貧困危難に臨ましむる勿かれ

○其二

余悲慘難危に遭遇す其初多く一身に關す中歳に

及びてハ多く政機より發す其末路に到てハ邦家の機に關す何ぞ其遭遇の奇なる唯歎息すべきは余質下愚にして智惠に乏敷眞勇の膽無く務め勵みて耐忍する而已故に執事活潑圓滑の跡なく心膽欽乏筋骨空敷枯痩し終に萬衆一笑の資となるに不過嗚呼誠に可憐

唯余と等敷者ハ老駑鞭影に恐れ重荷を負駄し終日汲々奔走し笞鞭の下に斃れて毫も憐む人なきと何ぞ夫れ殊ならむ

斷腸之記終

後序

此記明治十一年長夏無聊の際に係る同廿一年夏炎熱に苦む舊籍底中反古紙數葉を撿出す取て一讀す則此記事指を屈すれは已に十年前の事なり今哉實に世を隔てたるが如し古人云癡人に向て夢を説くなかれと余今此語を一轉して云ふ癡人自から夢を説くなりと

明治廿一年七月　　海舟

附録

明治一年駿河へ赴きし時賤機山の紅葉を
見てよめるなか歌短歌

天の下守りにし家の　ますら雄は
するかの國におり出る　賤機山の山かつと
ありは果つとも染出し　紅葉の色のいやたへに
わかき心を今よりは　やしほになしてわま照す
神に誓ひてすへらきの　御代の八千代ともろともに
思ひたゆまてあらかねの　くぬちのきはみ日の本の

國の御威をいやとほにいやしめすへくもろ〳〵の
まなひの道をあきらけく思ひきはめてひとすぢに
かへり見すなとわれはこそおもへ

染出る賤機山の紅葉は
ちりてもいろのかはらすもかな

物部安芳

明治のはしめ江戸のおほ城のあれ行く
を歎きて

もゝとせもあはれひと夜の夢なれや
あれこそまされ千代田たから田

同しき廿一年新皇居に參りてよめる

すみ馴れし千代田のおほ城ちとせ經む
大宮所になるそうれしき

物部安芳

書南洲西鄕翁絕命詩後

丁丑二月。鹿兒嶋亂方發。翁時出獵于大隅山。急報來告。翁將歸有所處。途憇肥後氏。偶有童子習字。翁把其筆。一詠一揮。乃此幅是也。爾後翁不復吟詠。不復把筆云。肥後氏知余與翁之交。頃特割愛見贈。噫是實翁之絕筆。又可以作翁之絕命詞也。至今誦之。感慨之情何堪。

明治庚辰晩冬

海舟 勝 安芳 誌

白髮衰顏非所意　壯心橫劍愧無勳
百千窮鬼吾何畏　脫出人間虎豹群

南洲

亡友南洲氏　風雲定大是　拂衣故山去　胸襟淡如水
悠然事躬耕　嗚呼一高士　只道自居正　豈意紊國紀
不圖遭世變　甘受賊名訾　笑擲此殘骸　以附數弟子
毀譽皆皮相　誰能察微旨　唯有精靈在　千載存知已

友人 海舟 勝 安芳

明治二十一年十月二十一日印刷
明治二十一年十月二十二日出版

版權所有

著作者　勝安芳　東京赤阪區氷川町四番地
發行者　石光與吉　東京神田區雉子町三十二番地與論社
印刷者　綿貫鉄次郎　東京神田區佐久間町三丁目卅六番地
印刷所　秀英舍　東京京橋區西紺屋町二十六七番地
發賣所　與論社　東京神田區雉子町三十二番地

嶋田三郎著

井伊掃部頭ハ日本開國ノ歴史ニ於テ第一流ヲ占ムルノ人傑ナリ此人ヲシラサレハ以テ開國史ヲ知ル能ハス而シテ此人ヤ其意見ハ幸ニシテ身後ノ勝利ヲ得タリト雖モ其壽像ハ不幸ニモ敵黨ノ爲メニ描カレ之レカ爲メニ不實ノ罪ヲ負フヿ甚タ尠シトセス本書ハ有名ナル島田三郎君カ靈慧ナル識見ト確實ナル證據トニ依リ近世史ノ粗魯孟浪ナルヲ辨駁シテ漏ラサス安政以來ノ疑案ヲ豁然氷解セシメタルモノナリ

本書出版以來多少水藩派ノ攻撃ヲ受ケタリト雖モ之レカ爲メニ却テ一層ノ愛讀者ヲ增加シタリ依テ更ニ數千部ヲ增刷シ定價ヲ低減シテ金壹圓五拾錢ニ引下ケタリ幸ニ倍舊ノ高需ヲ乞フ

東京神田區雉子町

輿論社

今改